



## 和文論文作りを通して コミュニケーションを考える

### その9 「客観的」と「説得」

呉大学看護学部  
山下 洵子

昨年のこの「交流」コーナー<sup>1)</sup>で、井野博満さんが科学で問題とする「客観的な見方・判断」にふれられた。そのなかで、“立場の違いが認識を変える”から“一つの事実を客観的に表現することはできない相談である。その場合、相互の関係が対等であるならば、対話を通じて相手の意見を聞いて自分の見方を修正してゆくことが可能になるが、そうでないと強者は自分の見方を正しいとして相手に押し付けることになる。社会において、平等と公正がコミュニケーションと相互理解のベースである”と書いておられる。

そして、終わりの方で、“それにしても、いくらなんでも最近のブッシュ政権のやり様は、平等と公正の観点からみてひどすぎると思うのだが、山下さんいかがでしょう？”と、短い期間だが米国で生活した体験があるというだけで私に、とても難しい問いを投げかけられた。

あのとときの井野さんの悪い予感“この原稿が印刷物になる頃には、対イラク戦争が始まってしまうかもしれない”が、そのあとすぐに現実になった。それどころか、昨年5月1日、米国は戦闘終結宣言をしたにもかかわらず、いまだイラクは戦争の真っ只中にある。

しかも、あろうことか、ついに、日本もこの「戦争」に参加することを決定した。すでに、自衛隊第一陣は昨年暮れ（2003年12月26日）イラクへ向かい、この原稿を書き始めた今日（2004年1月17日）、後続隊が出発する。

実は、私は、井野さんのあの原稿を読んだ頃、ブッシュ大統領は本当は戦争なんかやりたくないはず、だから戦争を起こすなんてあり得ない、と決め込んでいた。既に、米国は、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争……と他国に侵略したことで出てきた悪い結果から、「正義」をかざして他国に侵略したのは傲慢であったと十分過ぎるほど反省しているはずだから、と。

とはいえ、一度「ヤル！」と挙げた拳は、面子があるからそうそうは下ろせない。プライドを傷つけないで引っ込める機会を探しているに違いない。そのうち口実のできる適当な事変を見つけて回避するに違いない、と予想していた。

その見当違いの分析は、そのまま小泉首相へも向けられ、井野さんのことばではないが、“いくらなんでも”「戦地」へ自衛隊を派遣するわけがない、と確信に近い思い込みをしていた。我が国の首相は、そのように憲法の解釈を変えるのではなく、米国に追従する気か！という非難に答えるため独自の決断を見せるはず、と。そう予想していたから、12月26日イランで大地震が起こったとき、これでよい口実ができた、イラクの部隊をイランの復興支援へ移動させるだろう、と安堵した。

事実を知らずに想像に想像を重ねて分析すると、このように間違いを犯す……。

#### ■ 「立場」の違いが「解釈」を変える

ところで、私は、井野さんの“平等と公正がコミュニケーションと相互理解のベースである”にまった

やました じゅんこ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

く同感である。しかし、ことはさように簡単ではない。世にはいろいろな人がいる。生きてきた歴史がそれぞれ違い、いま立つ場も違う。相互理解を始めようとする事さえ、そうそう容易ではない。

まず、互いのあいだに「平等と公正」のベースを築こうとする始めの段階で、互いが準備しなければならないことがある。出発の段階から既にずれがあるということのないように、論議にのせる語句の概念を共通にしておきたい。例えば、私の領域（栄養学の分野）で、食物繊維のヒトの健康への影響について論じるときのことを考えてみよう。

まず、「食物繊維」をどう解釈するかを取り決める。食物繊維の定義は、1. ヒトの消化酵素で分解されない植物細胞壁成分、2. ヒトの消化酵素で分解されない食物中の高分子成分、3. ヒトの消化酵素で加水分解されない食物中の成分、4. ヒトがとり入れてもエネルギー源にならない食物中の多糖類……など、研究者のなかで必ずしも一致していない。権威のある学会で認められたものはいちおうあるが、それも数十年前といまでは違う。論議の中味によっては以前の定義で構わないこともあろうし、かならずしも定義に従わなくてもよいこともある。

どう定義するかで、論議のなかにどういう類の論議が持ち込めるかが変わる。1を採用するなら、エビやカニの殻に含まれるキチンは除外される。2を採用するなら、オリゴ糖は除外される。3を採用すれば、ろう（蠟）も入り、ある種の魚などは論議の対象になる。4を採用するなら、セルロースは除外される……など。

しかし、ここが肝腎なことであるが、自然科学の場であれば、互いの定義が違っても、違うということが互いに確認できればほとんど問題にはならない。今回はどれを採用するかを折り合せて決め、あとは対等の立場で同じ土俵に立つことができるからである。

ところが、定義からして合意が得られない場合がある。語句の解釈が違って折り合えず、どうにもならないことがある。つまり、何が言いたいかということ、憲法9条をどう解釈しても、「この度の自衛隊派遣は違憲である」以外の解釈が出てこない、ということ。これは私の解釈であり、そうでない解釈と折り合えない。

どう解釈すると、海外派遣が可能であるとなるのか、私にはどうしてもわからない。わかることは、車輪が捻じられて横に進むようになり、それを世論が押ししている、ということ。問題は、その後押しがどうやって出てきたか、である。

そこで、考える。それは、私たちが「事実」を知らされていないから起こったことではないか、と。私が知らなければ、どんな事実も私にとって「事実」とはならない。

実際のところ、イラク戦争について、私たちは一体どれだけのことを知っているであろう？ 知らされているであろう？

私たちが得る情報のほとんどは、マスコミから来る。「ブッシュに感謝しています」「フセインが捕まってよかった」「日本人は信頼できます」「自衛隊の活動を待ちわびています」「サマワの治安は安定しています」といったイラクからの声は、私が現地でイラク市民から直接聞いたものではない。イラクに現地入りした信頼する友人からのものでもない。

マスコミからの情報はほとんどが米国政府の庇護下で収集され、それなりの意図をもって編集されて、私たちに流される。私が受け取るのはたくさんある情報のごく一部。しかも、私の全く知らない外国語からの訳語のかたちで伝えられたものだけ。自然科学の分野で得られる情報、つまり、隠し立てなく公開されてこそ、「事実」として認められる実験結果とはだいぶ違う。

## ■ 科学的命題と価値的命題

世の中には、「科学で扱うことができる問題」と「科学で扱うことができない問題」とがある。いまそれを、「科学的命題」と「価値的命題」<sup>2)</sup>とに分ける分類に従う。

戦争はいけないのか、人を殺すことは悪であるのか、独裁者は悪人であるのか、独裁者を倒すのは善であるのか、テロリストは撲滅しなければならないのか……といった命題は、自然科学が立ち入るところではない。価値的命題に入る。日常生活では、この価値的命題に関わることの方が多し、自分の生

き様には科学的命題よりずっと意味があることも多い。

科学的命題は私の価値観とは無関係。私から独立して、状況証拠から出てくる事実に関わる。特定の誰かの価値基準に影響されない。また、イラク国内にあるかもしれない大量破壊兵器は「悪」で、米国の所有する多量の大量破壊兵器は「善」である、などと同じ事柄に対して二重基準を置くこともない。普遍的、客観的にそうであると認められるときに事実として成立する。状況証拠があつてのこと。事実の検証に関わる人の“立場性が入る”<sup>1)</sup>にしても、またそのために隠された事実があるにしても、事実そのものが曲げて公表されない限り、事実は事実。それなりに客観性があるから、他の人とその事実を共有することができる。

広島人である私は、とりわけ、「核」に敏感である。そこで、核にこだわってもう少し話を進める。

イラク戦争で劣化ウラン弾あるいは非劣化ウラン弾が落とされた、という情報がある。

どのくらいの量の放射性物質が落とされたのか？

放射能の被害調査は、いつ、誰が、どの地点で、どのような方法で行ったのか？

調査の目的は何か？

調査結果は、いつどういう形で公表されたのか？

極秘にされた情報は何か？

いま、どの地点で、どのような環境の変化が見られるのか？

今後、イラク、そしてそれ以外の国にどのような影響を与えると予想されるのか？

など、次々に疑問が湧いてくる。そうした疑問の答えが科学的命題の事実。

いま、フセインは悪くてブッシュの方がまだましなのか？という価値的命題を解こうとする。例えば、劣化ウラン弾の使用はなかったと認識してかかるのと、劣化ウラン弾を使用したと認識してかかるのでは違う事実認識をしているが、事実はどちらかひとつ。その事実は、他の人と共有できる。

科学的命題の事実を間違つて認識して価値的命題を論じれば、私が先にブッシュ大統領や小泉首相の判断を全く違う分析をしたように、間違つた分析となる。そうした誤りはできるだけ避けたいものだ。科学的命題の事実をベースにして、価値的命題を論じたい。そうすれば、共有できる事実をベースにするので、より説得力をもつ<sup>1)</sup>ことになる。

## ■ まず感じる。そして理屈がついてくる

しかし、はたして、私の頭のなかで思考はそのように理論整然と進んでいくであろうか？ ひとには、科学的命題を解いてから価値命題に移る、という手順をいつも踏むのであろうか？

さきほどのウラン弾の話にもどして、私自身の思考の流れをみしてみる。

戦争はいやだ、どんなことがあつても「核」は使うべきではない！ それは動かぬ私の感情である。その感情が自分の中にあるのを知って、その気持ちを他の人と共有したいと思っている自分を見る。

つまり、戦争は怖い、辛い、耐えられない。どんな理由があつても核を使用するのはいけない、という感情が先にある。その後で、「おまえは感情的だ」と言われないように、科学的命題の事実をできるだけたくさん集めてきて並べながら、私の感情の妥当性をできるだけ客観的に説明しようとしている。まず感覚でとらえた結論が先にあつて、そのあとで理屈をつけてその感情の妥当性を説明しようとしている。こうした順序は、論理的でなく感情的なのであろうか？ どうにしても、これが私の事実である。

だからこそ、私は、始めに湧いてくる感情に拘る。この感情はどのようにしてつくられたのか？

それこそ、科学的命題に関わる過程で得た事実、事実、事実、それを寄せ集めてつくりあげられてきた結果なのであろう。私たちは、次々に入ってくるたくさんの事実を意識してあるいは無意識のうちに、自分のなかで繋げていく作業をしている。

しかし、人の行ないや企てを評価する価値的命題は、自然科学での事実認識の正否とは違う。絶対的、普遍的な善悪はないであろう。いま認められている「正義」も、場所を変え時代を違えれば、極悪である例は決して少なくない。歴史に残る英雄も、いまから見ればテロリスト。その逆もあろう。

例えば、石川五右衛門。盗みの罪を重ね、釜煎りの刑を受け、五右衛門風呂の名まで残す大盗賊団首

領であるが、現在の法に照らすと15年くらいの懲役である<sup>3)</sup>、という。彼は、“自身は金品を盗む泥棒だが、秀吉は、日本を盗んだ大泥棒との思いがエスカレートしていき”名古屋城天守閣の金のしゃちほこを手に入れただけで気が済まず、のちに伏見城に忍び込み、秀吉の首と秘法のチドリの香炉を盗もうとした<sup>3)</sup>のだそうだ。

いま、その秀吉に米国大統領が重なり、米軍に抗しているメンバーが五右衛門に重なる。頂点に立つことを目指す者が、自分に反抗し邪魔する者にとことん制裁を加えるのは、世の常。大きな力を持つ者は、理不尽な行ないをしても正義として認められる。力なき者は、たいていは黙ってそれを受け入れる。そうやって私たち人類の歴史はつくられてきた。それが、事実であろう。

## ■ 今、私たちはどう考えるか？

15歳で社長になった家本賢太郎氏は“人生には本当に多くの選択肢があります。失敗や挫折をしても、障害を持って、ヤケにならずに、できることから一步步前に進んでいけば、きっと道は開けます。そしてその道は、もしかしたら自分が本来進みたかった道につながっているかもしれないのです”<sup>4)</sup>、と19歳のとき書いておられる。

私は、若者たちからこういったことばを聞くとき、襟を立てるような気持ちになる。そして、あらためて、私たちの住む日本が、いま、ほんとうに「平和な」国であることを実感する。そして、10歳になったかならぬかで、銃を抱え、まわりすべてが戦場で毎日をおくるイラクの若者たちに思いを馳せる。他人の好みや主義で自分たちの可能性が奪われている若者たち。彼らは、いま、どんな可能性を信じて生きているのであろう？ 日本の若者と同じような権利が彼らにもあるのに。もし戦争さえなければ、彼らのうちの誰かは、いま、ここ呉で日本の若者たちと素敵な交流をしているかもしれないのに。

いま、「平和な」日本をじっくり見てみよう。この括弧付の「平和」は、イラクのような国に住む人たちの生きようの上に築かれている。そのことを忘れてはいけない。いま、食べているこの米。機械を使って育てられ収穫された。その機械を動かす燃料は石油産出国から来た。日本へ石油を輸出することで、その国の人たちにどのような影響を与えたのか。食べたくとも、ろくろく食べ物が手に入らない人たちの生活とどう繋がっているのか……。そんなことを若者たちと考えてみたい。「平和な」日本で、若者たちと一緒にそのことをきちんと考えてみよう。幸い、私のまわりにはたくさんの若者たちがいる。日本の若者、イラクの若者、ともに明日の可能性がある世づくり、そのために何をどう捉え、そのうえで私たちに何ができるかを一緒に考えていきたい。他の立場を少しでも分かり合い、平和であるという実感が共有できる他との繋がりを育てていきたい。それが、「平和な」日本に住む私たちの責任である、と思う。

イラクに一刻もはやく「平和」が返ってほしい。

唯一の解決策は、戦争を続けることではない。復讐はあらたな復讐を生む。戦争を続ければ続けるだけ、被害者を増やし同時に加害者をも増やす。私たちはこれ以上加害者になってはいけない！ これは、世界で最初の被爆国ヒロシマからの叫びである。

ここまで、“客観的で説得力がある”<sup>1)</sup>書き方をしてきたかどうか自信はない……。それでも、この点はこの拙文を読んで下さった方々に共感してもらえると祈りながら――。

## 文 献

- 1) 井野博満：自然科学は客観的か，看護学統合研究 4(1)49-51, 2003.
- 2) 安斎育郎：科学と非科学の間，筑摩書房，p.14, 2002.
- 3) 大淵憲一監修，上野昭三著：歴史人物おもしろ裁判所，コスモ出版，1997.
- 4) 家本賢太郎：僕が15で社長になった理由，ソフトバンク パブリッシング，pp.272-273, 2001.